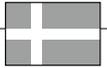


LETTER FROM COPENHAGEN
コペンハーゲン通信 PART VIII
1



氷が張った運河



デンマーク王国 DATA

人口582万人、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。自治領にグリーンランドとフェロー諸島。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、気候変動対策やデジタル化に注力。アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。

2007年1月より本会事務局職員が在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度で高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。



瀬間 雄介

在デンマーク日本国大使館二等書記官
(経済同友会事務局より出向中)

デンマークの社会再開に向けた人々の思い

2021年1月、小林功人書記官の後任として着任した瀬間雄介と申します。大使館では経済班として、日本企業支援やデンマーク経済情勢の調査などを担当しています。

1月のデンマーク。ピークを迎えた新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、12月から再び適用された全国的な閉鎖措置の中、入国制限が最も厳格な時期の赴任となりました。入国審査で入国希望理由を尋ねられ、新たに日本大使館で勤務を開始するため、と答えると、「なぜ今でなければならぬのか」などと詰問の数々。なかなか通してもらえず、さっそく出端をくじかれました。

2月になると、10年に一度という記録的な寒波が襲来。本住居が決まるまで、私は運河の畔のアパートで仮住まいでしたが、なんと幅が200m以上に及ぶ運河の表面が氷で覆われてしまった時期もあったほどです。ある土曜日の朝、近隣にある日本発のアンデルセンベーカリーでパンを購入し、運河沿いを散歩していたときのこと。気温マイナス7℃の寒さの中、談笑する2人の水着の女性がおもむろに運河に飛び込み、泳ぎ始めるではありませんか。ロックダウン中、周囲のデンマーク人に倣いなるべく体を動かすようにしていましたが、これはさすがにまねできません。

さて、3月以後、全面的なコロナ関連規制は徐々に解除されていきました。それを後押ししたのは、ワクチン接種の進展に加え、大規模な検査体制の構築にあったといえるかもしれません。デンマークでは、抗原検査の検査所が全国に多数仮設され、無料かつ予約不要。結果が数十分のうちに届くほか、検査所へのアクセスも気軽に容易です。

ある日、仕事帰りに検査所に立ち寄りしました。軽快なポップスのBGMが流れる会場には、1番から10番までのブースが並びます。すると、誘導係がやってきて、突然、「さてクイズです！ あなたは7番と9番のブース、どちらが先に空くと思いますか？」と、予期せぬ展開に。とりあえず、7番だと思う、と答えると、「私は9番だと思いますよ。答えは…。7番、正解です！ 私の負けですね。どうぞお進みください！」といった調子で楽しませてくれます。続いて、7番ブースに入ると、検査員から「検査はお好きですか？」とまた予想外の質問。あまり好きではない、と正直に答えると、「安心してください。私はコペンハーゲンで一番の腕なので！」などと冗談で応じてくれます。検査終了後にありがとうございますと伝えると、「ありがとうございますとってくれることに感謝します」と逆にお礼を言われました。

社会再開に向け、一人ひとりの思い、努力や工夫が功を奏した側面があるのではないかと感じた次第です。